

## 武蔵野日曜聖書講筈

## 天国は一粒の芥種の如し

——マタイ伝第13章31～35節——

1993年10月17日

小池辰雄

聖霊を宿す 聖霊という芥種 聖霊を宿した一粒の芥種 一人びとりが天国の芥種 隠れたる事

## 【マタイ13】

31 また他の譬たとえを示して言いたもう『天国は一粒の芥種からしだねのごとし、人これを取りてその畑に播まくときは、32 万の種よろめよりも小さけれど、育ちては、他の野菜よりも大きく、樹きとなりて空の鳥きたり、其の枝に宿るほどなり』

33 また他の譬を語りたもう『天国はパンだねのごとし、女これを取りて、三斗との粉の中に入るれば、悉ことごとくと脹ふくれいだすなり』34 イエスすべて此等のことを、譬にて群衆に語りたもう、譬ならでは何事も語り給わず。35 これ預言者によりて云われたる言の成就せん為なり。曰く、『われ譬を設けて口を開き、世の創はじめより隠れたる事を言い出さん』

## ● 聖霊を宿す

クリスチャンも

「一粒の芥種からしだね」

だと思ふわけです。我々一人びとりが一粒の芥種である。一粒の芥種であるためには、聖霊を宿さなければ芥種になれない。だから、芥種ということの實質は、キリスト者においては、聖霊を宿すこと。聖霊の力でふくらんでいくのですから。伝道もそういうことです。私は1950年の晩秋に阿蘇の山へ行つて、聖霊をいただきました。私にとつてはそれがペンテコステであつたわけです。私に聖霊が宿つてから本当の伝道ができるようになった。北は北海道から南は鹿児島まで、知らない間に十二の召団ができてしまった。一粒の芥種が日本全国のおちらこちに飛火して聖霊の火が燃えた。我々は聖霊を宿して皆一粒の芥種になつて、知らない間に一人二人三人と、伝道を一対一で皆さんがなぎつていらつしやるわけです。小さな一人から何人できるか分からない。数える必要はないけれども。

## 「天国は……」

というのは、我々一人びとりは天国体です。聖霊を宿すと天国体だから。もちろん、聖霊



を宿すためには十字架が土台です。十字架の土台のない聖霊はあぶない。十字架と聖霊は不可離の関係にある。即ち、贖罪を受けて、そこに聖霊が臨んでくる。

私が一粒の芥種になったら、方々に召団が自ずからできた。どうせ人間ですから、どれもこれもみな破れ器です。破れ器で差し支えない。問題は、

「その中に本当の聖霊の種があるか」  
 だけです。それは、

「十字架を本当に受けとっているか」  
 から始まりますけれども。

一人びとりは小さい存在だけでも、ところが、その中に聖霊という素粒子があれば、それが爆発していく。

「<sup>32</sup>万の種よろずよりも小さけれど、それが樹となり、空の鳥が宿るほどの大きな集団よになつていく」

という。いわゆる人間的な気持でもって伝道しなくても――いやむしろそうしたらダメなんで――自ずから成る。聖霊の愛の力です。聖霊は愛の力をもっている。聖霊というのはいろいろな内容を豊かに持ちますから。智慧でもあるし、力でもあるし、光でもあるし、聖霊は本当にありがたい。聖霊と替えられるものは世界中に何も無い。これはキリストの霊ですから。要するに、キリストに飛び込んでいかななくては。

### ●聖霊という芥種

「求めよ、さらば与えられん」

というのは、

「キリスト自身を求めると聖霊が与えられる」

ということ。キリストは十字架の門を開いていますから、誰でも入れる。資格はひとつも要らない。あるがままで入っていけば、変質変貌させられていく。福音を

「キリスト教」

なんて言つて、かしまつて聖書の研究とかなんとかやつて参考書を読んだつて、そんなことをしたつて入れはしない。何も要らん。聖書一巻でたくさんです。そして、キリストの中に自分を投げ入れる。自分を投げ入れることが本当の求めなんだ、本当の祈りなんだ。だから、祈入、祈り入る。この神秘な現実を受けとるまでは――やはり福音の世界は、言葉の深い意味で神秘ですから、理屈ではないから――自分で体験するまでは、いくら説明したつてしょうがない。

それが聖霊という芥種です。我々が聖霊を宿すと、我々自身がそういった

「一粒の芥種」

になる。み霊の生命で充満するわけです。そして、殻を破つて根を張り芽を吹き出す。だ



から、

「畑に播くときは、<sup>32</sup> 万の種よりも小さけれど、樹となり空の鳥きたる」

という。そういう人間わざでない本当の伝道がなかなかない。一生懸命で聖書の話をしても、分かったような気持ちにならなくて、そんないわゆる外側の分りではダメなんだ。だから、私は

「キリスト教」

という言い方は嫌いだ。教えるではない。もし言うなら、

「キリスト道」

です。

「我は道なり」

とキリストは言われた。神からの道であり、神への道である。キリスト道というのが本当の言い方です。教ではない。教なんて言うから、

「どんな教えか？」

と言つて、それでみな躓いて、いい加減で嫌になつてしまふ。

聖書も単なる言葉の世界ではない。霊言の世界、或いは言霊の世界です。だから、物理の世界と相通するわけです。物理、霊理、霊の理。物と言つたつて、本当はみなこの霊の世界だ。

「宇宙の大霊」

なんていう言葉もある。仏の世界でもそうでしょ。単なる悟りではない。本当に身体で存在で受けとらなければ、悟りにはならない。単なる瞑想ではダメです。キリストの福音とこのはそういう非常にぶ厚な、多次元的なものです。

### ● 聖霊を宿した一粒の芥種

「天国は一粒の芥種の<sup>からだね</sup>ごとし」

と。それがふくらんで、そして大きな天国になる。問題は我々一人びとりが聖霊を宿して、一粒の芥種になること。そうすれば、どこに播かれたつて、これは必ず実る。

「畑に播くときは」

と書いてあるけれども、畑でなくたつて、砂地だつて路傍だつてどこだつていい。タンポポなんていうのは、路傍の石の間から顔を出して咲いている。あのタンポポの種は強いものだ。私はよく、路傍にタンポポが咲いていると、タンポポというのは素晴らしい草花だなあと思う。少しも肥料もないような所からきれいな花が咲いている。

野性のものというのはいはり生命力がある。庭で人間に手入れされて育つようなことでは——悪くはないけれども——嵐には耐えることができなくなつてしまふ。人間もいろいろなことのでつくわして、そして鍛えられていくのが本当にいい。温室育ちはダメなわけ



です。

聖霊を宿さないというところ——大体ここに幾人来たか知らんが、通算で何百人来たでしょうかね——それが

「本当のキリスト者になっているか」

というところ、だいぶ疑問ですね。本当にみ霊を宿してうれしければ、いつでも私の所に訪ねてくるはずですよ。それがさつぱり訪ねてこない。ということとは結局、

「枯れてしまっているか、造花になってしまっているか」

なんてなわけですよ。全く情けないですよ、そういう受け方をしたら。しかし、身体が弱くて普段来なくても、しっかりした、み霊をいただいているクリスチャンはいるけれども。

私は——自分のことを言っておかしいけれども——藤井先生の集会を休んだことはない。5年間、先生が仆れるまで。先生は1930年の7月14日に天界に往かれましたけれども、最後の集会は6月30日、今でも覚えています。

近くに野原があつてね——今はなくなつてしまつた、家が建つてしまつている——素晴らしい野原で、先生はよく散歩に行かれた。そこから富士山が見えるし、丹沢の山々が見えた。ああいう素晴らしい野原がなくなつてしまつて、情けないね、全く。あまり家が建ちすぎてしまつた。八王子かあつちの方へ行かないと武蔵野らしい所がなくなつてしまつた。自然と交わるような小都会、小さな町とか村とか、そういう所で生活するのが、本当は人間が一番いい。東京なんてのはしょうがない。仕方がないから時々出かけていかないとね。

### ●一人びとりが天国の芥種

我々一人びとりが

「天国の芥種」

になる。そして、おのずから伝道がなされていく。

「**樹となりて空の鳥きたり其の枝に宿るほどなり**」

とは、やはりキリストのこの譬話は素晴らしい。そのように、キリストを宿す天国が展開していく。キリストのこの悲願がどの程度本当に現実になっているかというところ、まことに情けない現実ですよ、キリスト教界は。いわゆる教会はたくさんあるかも知れないけれども、中身はどうか。本当に生命のある、光のある、愛のある、力のある中身はどれだけあるか。皆さんも、そういった幕屋をだんだんお開きになってください。私がいる間は日曜はここにいらつしやいますけれども、土曜でも何でもいいですよ、ご自分でなさることです。

日本人は一般の文化人も、民主主義も、リンカーンが言ったように

「アンダー・ゴッド」

ではないんだ。



「神の下」

でない民主主義だから、日本のデモクラシーは困った民主主義だ。アメリカのリンカーンはさすがにアンダー・ゴッドです。

「神の下における、人民の人民による人民のための政治」

だ。だから、日本の民主主義はいつまでたってもダメです。

大体、私は「主義」という言葉はあまり好きではない。グラッドストーンとビスマルクとリンカーンのこの三人は19世紀の最大の素晴らしい政治家です。彼らはみな福音を土台にしているから。日本の政治家は情けない。

「キリスト教」ではない。お釈迦さんでもいいですよ、本当に受けとれば。仏道にしる、キリスト道にしる、本当の意味における高次な宗教が土台になっていないと、何をしていても本ものにならない。

「宗教の世界が実は文化の本当の根底である」

ということ、私は大学で時々学生に言っていました。学生は聴いて、その時は感心したような顔をして聴いているけれども、そこへ自分で入ってこない。ここにいる少数の方は入ってこられたけれども。

それくらいキリストの本当の弟子も結局少ない。キルケゴールが、

「本当のクリスチャンは天才よりも少ない」

と言った。さすがにキルケゴールの言葉だ。本ものは少ない。仕方がない。キリストの本当の弟子もやはり数えるほどしかいなかった。あれだけキリストは伝道されて、多くの者が大いに喜んだけれども、受けとった者は結局、ペテロ、ヨハネ、パウロ……。

パウロは復活のキリストにでつくわしてひっくり返されて、本ものになって、荒野で祈つてからだ。そしたら、パウロという本ものができた。一人の本ものができる、やはりこれは

「芥種の如し」

で、たくさんの花が咲いて実が稔った。ルターもそうです。改革者たちはみなそうです。ウエスレーもそうだし。日本では、内村鑑三、海老名弾正、賀川豊彦というような方でしようね。

皆さんも、み霊を宿しておられるから、

「一粒の芥種」

ですから、望みをもって大いにやってください。み霊を宿した芥種は、いかなる患難にも決して負けないで突破していきますから。

### ●隠れたる事

このマタイ伝13章31～32節は非常に大事なキリストの譬えです。



34 イエスすべて此等のことを、譬にて群衆に語りたまう、譬ならでは何事も語り給わず。35 これ預言者によりて云われたる言の成就せん為なり。曰く、『われ譬を設けて口を開き、世の創より隠れたる事を言い出さん』

新約聖書で「預言者」と言われるときには、詩篇も入る。この場合は詩篇78篇の2節、

「わが民よわが教訓をきき、わが口のことばになんじらの耳をかたぶけよ。  
2 われ口をひらきて譬喩をもうけ、いにしへの玄幽なる語をかたりいでん。

「玄幽」とは素晴らしい漢字だね。玄妙にして幽玄なるもの。

3 是われらが先にききしところ知りしところ又われらが列祖のかたりつたえし所なり。

「知る」というのは頭で知るのではない。身体で知る。ヘブライ語の「知る」というのは存在的に受けとることを「知る」という。昔はみな語り伝えて受けとっていったんだね。

4 われら之を子孫にかくさず、エホバのもろもろの頌美と能力とそのなしたまえる奇しき事跡とをきたらんとする世につげん。

これは大事なことだね。

5 そはエホバ証詞をヤコブのうちにて、律法をイスラエルのうちに定めてその子孫にしらすべきことをわれらの列祖におおせたまいたればなり。」(詩

篇78・1～5)

78篇はおもしろいところだ。出エジプトのことを歴史的に並べて書いてある。

「52 されどおのれの民を羊のごとくに引きだし、かれらを曠野にてけだもの群のごとくにみちびき、53 かれらをともないておそれなく安けからしめ給えり。されど海はかれらの仇をおおえり。

紅海を渡ったときに、彼らが渡りきったら、後から押しかけてきた敵がみな水に吞まれてしまった。

55 ……その地をわかつて嗣業となし、イスラエルの族をかれらの幕屋にすまわせたまえり。」(詩篇78・52～55)

「幕屋」という言葉がここにも出ている。幕屋というのは旧約から新約の黙示録まで時々出てくる言葉です。聖書は凄いね。時々読んでいないというのと、

「あつ、ここにこんなことがあったか」

なんて、忘れてしまうから。

